

第1部

国際シンポジウム

各国における神道研究の現状と課題



I はじめに

ドイツ語圏における日本研究の起源はかなり昔に遡ります。ヨーロッパ人の眼から近世の日本を記述した最も価値ある記録として、エンゲルベルト・ケンペル (Engelbert Kaempfer, 1651-1716) やフィリップ・フランツ・フォン・シーボルト (Philip Franz von Siebold, 1796-1866) などの学者が残した日本旅行記を挙げることができます (Kaempfer 1999, 布施 1988 参照)。19 世紀、とくに明治維新後の時代になると、個々の教養人が日本語を習得し、日本文化の原典をドイツ語に翻訳する努力を重ねるようになりました¹。ただし、最初は孤立した事業でしかなく、一つの継続的な学問分野としてはまだ成長していませんでした。ドイツ語圏で「Japanologie」、つまり日本学、というようなものについて語れるのは、恒久的な講座が設立されてからのことです。つまり、その発展は 20 世紀の初期のことで、この分野で主導的な地位にあった英語圏に若干の遅れを取っただけでした。

II 日本学の創立

東京帝国大学でドイツ文学の教授を何年か歴任した後、1914 年にハンブルクで日本学の最初の教授になったのは、カール・フロレンツ (Karl Florenz, 1865-1939) でした²。フロレンツの学問的方法論は当時流行していた文化概念に則しており、文学、歴史、宗教などの古典を解明する中で日本文化を理解することでした。彼はこうしたすべての分野で活躍していますが、彼の最大の業績は『古事記』と『日本書紀』の大部分をドイツ語に翻訳したことでしょう (Florenz 1892, 1901)。その意味で、ドイツ語圏において神道は日本研究で最も傑出した研究課題であったと言えるでしょう。アストン (William George Aston) やチェンバレン (Basil Hall Chamberlain) などの英語圏の先駆者を考えても、ドイツ語圏の事情は決して特殊なものではありませんでした。

カール・フロレンツの後継者であるヴィルヘルム・グンデルト (Wilhelm Gundert, 1880-1971) も、宗教史を特別に考慮する古典的な文化理解に留まっています。彼の宗教史的関心は恐らく宣教師としての教育と関係があります。フロレンツとは対照的に、グンデルトはナチの活動家で、神道の扱いにおいても当時の「皇国史観」と一致した立場を取った、と非難されています (Fischer 2001: 350)。しかし、彼は宗教史の分野ではとくに仏教に関心を持っていました。「能楽における神道」(Gundert 1925) と題する彼の博士論文の他に、とくに神道について詳論してはいません。

¹ 一つの例としてオーストリア人のアウグスト・ピツマイアー (August Pfizmaier 1808-1887) を挙げられます。

² フロレンツは最初、日本語を井上哲次郎から学んでいますが、井上自身は若い頃ライプツィヒとベルリンで日本語教師として外国経験を積んでいます。

Ⅲ 第二次世界大戦前後

二つの世界大戦の間の時期になると、ドイツ語圏では古典だけでなく、国学とか水戸学派にも特別な関心が向けられました。個々の学問的業績を否認するわけではありませんが、ドイツ語圏日本学の研究方向には政治的現実が決定的な影響を与えているという印象は免れません。それは、とくに戦後になると神道についての取組みが突然中断するからです。このような発展については次の二つの例で説明できます。

著名なドイツ人宗教史家であるハインリッヒ・デュモリン (Heinrich Dumoulin, 1905-1995) はイエズス会の僧としての教育を受ける中で、日本語と日本文化の知識を習得しました。すでに青年時代に、日本で宣教師として活躍することを希望していました。彼は神学の勉強を卒業した後、1930年代に来日し、唯一の外国人として東京帝国大学宗教学の博士課程で学びました。ドイツ語も話せた聖書学者の石橋智信の指導の下、デュモリンは国学者である賀茂真淵に関する博士論文に取り掛かり、1943年に完成しています (Dumoulin 1943)。東大での学生時代、つまり1930年代の後期から40年代の前期にかけて、デュモリンはとくに当時新たに創刊され、ドイツ語を主にしていた定期刊行物「モニュメント・ニッポニカ」に積極的に執筆活動を展開します。国学に関する論文や多くの書評、また例えば吉田兼俱の『唯一神道名法要集』の最初のドイツ語訳などの翻訳を發表しています (Dumoulin 1940)。戦後は神父としての活動に重点が移ったようですが、1959年に『禅仏教の歴史』を公刊して再び学問の世界で注目されるようになりました (Dumoulin 1959)。二巻本の改訂版 (Dumoulin 1985) は英語にも訳され、今日でも西洋の日本学においては禅仏教史の基準的学術書と見なされています。それとは対照的に、デュモリンの神道に関する著書はほとんど忘れ去られています³。

第二次世界大戦前後の日本研究に関する二番目の仲介者として、ホルスト・ハミツチュ (Horst Hammitzsch, 1909-1991) を挙げたいと思います。1942年に彼は32歳の若さで政治的理由から教授職を追われたヨハネス・ユーバーシャール (Johannes Überschar) 教授の後継者としてライプツィヒ大学日本研究所の教授に任命されました。その招聘に関する確かな事情ははっきりしませんが (Worm 1994 参照)、少なくともハミツチュはナチ当局から好意的に見られていたと言えます。また、ハミツチュの初期の著作からも彼がナチの同調者であることが証明されます。にもかかわらず、このような活動が戦後になって彼に不利に働くことはありませんでした。まずミュンヘン大学の教授となり、1965年以後にはボッフム大学の日本学講座を構築しました。今日、ホルスト・ハミツチュはなかでも重要な原典便覧 (Hammitzsch 1981) の刊行者として知られています。それに対しあまり知られていないのは、彼もハインリッヒ・デュモリンと同様、戦前に神道思想史に関する仕

³ デュモリン神父の伝記については、(Heisig 1985) 参照。

事をしていたという事実です。1937年に書かれた博士論文は『倭姫命世記』の翻訳で、つまり中世の度会神道に関するものです (Hammitzsch 1937)。さらに、水戸学派の研究も発表しています (Hammitzsch 1939)。ただし、ハミツチュの最初の論文は「平田篤胤—日本の精神的闘士」(Hammitzsch 1936) という題で、篤胤をあからさまに人種差別主義的ナショナリズムの先駆者として後世に位置付けようとする試論となっています。ハミツチュは、その神道と天皇体制を再興しようとする理念を「深く人種と血の中に生息する原生命力」(Hammitzsch 1936: 26) の表現と解釈しています。戦後は神道史に関する研究を続けることはなく、茶道を特別研究の対象としました。

第二次大戦前のドイツの日本学者による神道の扱いは根本的にナチのプロパガンダだったのでは、と嫌疑をかけることは誇張かもしれません。しかし、戦後になってこの研究対象が突然断絶するという事情は、少なくともドイツ語圏の日本学者がそうした嫌疑をかけられていると感じていたことを物語っています。こうして神道をテーマとすることはタブー視されることになりました。戦前に神道を扱った学者たちがそのテーマを回避したことから、神道研究はほとんど途絶えてしまったのです。

IV 「ウィーン学派」とウィーンにおける日本研究

ただし例外として、日本民族学の分野には神道のテーマも含まれていました。そこで、戦前民族学のメッカと言われたウィーン大学の民族学研究所がその神道研究の一つの出発点となりました。すでに1938年に日本の民族学者岡正雄(1898-1982)の指導の下、ウィーンの民族学研究所の枠内で日本学講座が設立されていました。岡自身は国際的に名高いウィーン学派のヴィルヘルム・シュミット (Wilhelm Schmidt) 神父から、ウィーンで民族学を学ぶよう激励され、1934年にウィーン大学で博士号を取得しました。岡は戦時中に帰国したため、戦後になって岡の同級生であったアレクサンダー・スラヴィック (Alexander Slawik, 1900-1999) が日本研究を続行し、1965年に新設の日本学研究所で最初の教授になりました⁴。

ウィーン学派民族学の場合、とくに現存する「原始的」民族の研究から人類の原始時代を遡って解明しようという明確な意図に特徴があります。したがって、個々の文化の原始並びに初期の歴史に関する研究は特別な意味を持っていました。そこで、スラヴィックの最初の学問的努力は日本と韓国の始原史に向けられたのです。後にアイヌの研究にも及びましたが、折口信夫の「マレビト」の問題や須佐之男命の神話に関する論文も発表しています (Slawik 1959, 1993)。スラヴィックの時代のウィーンでは、岡や彼の学生たちとの活発な意見交換がなされ、とくに著名な神話学者大林太良もしばらくの間ウィーンに滞在しています。しかし、スラヴィックの学生の中から彼の民族学的関心を継承した学者はあ

⁴ 岡とスラヴィックについては、(Kreiner 1979, 1996) 参照。

まりいません。民族学的志向を持つウィーン大学の日本研究の最後の代表者はヨーゼフ・クライナー (Josef Kreiner) で、現在ボン大学で教鞭を取っています。彼は少なくとも「日本の村の祭祀集団」(Kreiner 1969) という初期の著書で神道の問題に言及しています。一方、ウィーン大学の現在の講座主任であるゼップ・リンハルト (Sepp Linhardt) の主導で、ウィーンの研究に、現代に関わる社会学的問題設定に至るようなまったく新たな展開が生まれました。ウィーンの研究ではつい最近になって宗教史の問題が新たに取り上げられるようになりました。吉田神道に関する私自身の仕事 (Scheid 2001) のほかに、私の同僚であるスザンネ・フォルマネク (Susanne Formanek) による江戸時代の巡礼システムに関する研究を挙げることができます (Formanek 2000)。

V ネリー・ナウマンの神話学・土着宗教

二十世紀後半に日本の土着宗教の研究分野で主導的地位を占めることになる学者は三年前なくなったネリー・ナウマン (Nelly Naumann, 1922-2000) です。彼女が戦中の時期にウィーン大学で日本学を卒業したことも偶然ではないでしょう⁵。その論考の結論において「ウィーン学派」と異なるとしても、研究テーマの射程距離はウィーン学派の民族学によって切り出された問題の範囲と相応しています。彼女の中心的研究分野は日本の神話であり、その関連において日本の原始ならびに初期の歴史も関わっています。こうしたテーマを扱う中で常に日本の民俗学、考古学、そしてその関連領域などの研究成果を参考にしながら組み入れるのです。さらに言語学の問題にも、また最終的には神道の一般的な歴史的展開についても立場を明確にしています。この関連で、ナウマンがすでに 1970 年に発表した「いわゆる原始神道への若干の注釈」という論文は注目すべきで、その中で彼女は「神道」という名称を持つ独自の宗教は日本古代の文献には登場しないということを論証したのです。これは、黒田俊雄がその有名な、1981 年に初めて英語で発表した「日本宗教史における神道」(Shinto in the History of Japanese Religion) という論文で提示したテーゼと似たような結論に達しています。ナウマンの最も重要な著書として「日本の土着宗教」(Naumann 1988, 1994) を挙げることができます。これは日本宗教史に関する彼女の研究成果をすべて総括した二巻本です。風俗と神話における神とその役割を集中的に研究したものであるのにも関わらず、ナウマンは研究対象を指示する宗教史のカテゴリーとしての「神道」という概念を拒否しています。こうして、神道という概念がそもそも何を意味するのかに関する持続的な議論の端緒を開くことになったのです。

VI 神道と国家主義

⁵ 博士論文は 1959 年に出版されました (Naumann 1959)。

ナウマンは第二次世界大戦後のドイツ語圏において、もっぱら神道ないし土着宗教に関心を示した数少ない学者の一人です。このテーマに関する発表論文では多くの観点を提示していますが、新しい宗派や国家神道の形態としての近代的神道に関する問題には言及していません。この問題については最近、ナウマンの弟子でテュービンゲン大学教授のクラウス・アントニ (Klaus Antoni) が扱っています。アントニは師の足跡を辿って神話史研究で学問的経歴を開始した人ですが (Antoni 1982, 1988)、90年代には研究の重点を移し、幕末から明治と昭和の時代の神道の問題をとくにイデオロギー批判の展望から扱うようになりました (Antoni 1991)。『神道と日本国体の構想』 (Antoni 1998) という著書は、ネリー・ナウマンが創設した土着宗教史研究のための刊行シリーズの第三巻として出版されています。その本の中でアントニは江戸時代の初めから現代にいたるまでの神道の発展について概観する中で、とくに近代日本ナショナリズムの問題に取り掛かっています。

さらに、法制史的観点から国家神道を扱っているのが (かつて国学院大学に留学し、現在は東洋大学教授である) エルンスト・ロコヴァント (Ernst Lokowandt) です。「明治時代前半における国家神道の法的発展」と題する彼の博士論文は、私の知る限り、このテーマに関する最初のドイツ語研究書で、1975年に出版されました⁶。神道とナショナリズムの問題の関連で、ペーター・フィッシャー (Peter Fischer) も挙げておくべきでしょう。彼は仏教研究者で、とくに日本仏教における国家主義的イデオロギーの問題を扱いました (Fischer 1979) が、国家主義的神道イデオロギーの問題にも言及するようになります。

こうした例からも明らかなように、戦後最初の世代の日本学者の中では、彼らの恩師がその教説の中で育った国家神道イデオロギーと直接対決しているとはまったく感じられません。やっと「孫の世代」になってそうした課題に立ち向かうようになります。

VII 思想史・社会史、または新宗教の研究

1980年代には、江戸時代における神道の思想史的役割も新たな研究の対象となりました。クラウス・クラハト (Klaus Kracht) の「近世日本の思想史研究: 朱子学の「神」に関する論考」 (Kracht 1985) は神に関する哲学的言説を扱っていますが、江戸時代の朱子学の教養エリートに限定され、林羅山、新井白石、山片蟠桃の著作を詳しく分析しています。したがって、現在ベルリン大学で教鞭を取るクラハトは、厳密には神道史家とは呼べませんが、ドイツ語圏日本研究においてこの問題の解明に貢献しています。また、網野善彦などの研究を基礎にしながら、とくに日本中世の職人について論じているミュンヘン大学のクラウス・フォルマー (Klaus Vollmer) についても、同様のことが言えるでしょう (Vollmer 1995)。

⁶ 以後、国家神道の法制史に関する論文が続いていますが、最近出版された一般的な神道入門 (2001) を除くと、別の視点からの神道に関する詳論はまだありません。

最終的にはドイツ語圏日本学者の若い世代では新宗教や新新宗教との取組みが強化されています。こうした宗教運動の混合主義的性格に則し、本来の神道研究とは呼べませんが、神道の様々な視点に触れざるを得ません。この分野での先駆者であるヨハネス・ラウベ (Johannes Laube) はとくに天理教を研究しましたが、神道の一般的視点について言及しています。若い世代の研究者にはウルリケ・ヴェール (Ulrike Wöhr)、インケン・プロール (Inken Prohl)、またビルギット・シュテムラー (Birgit Staemmler) などの名を挙げることができます。

VII 結語

総括しますと、ドイツ語圏の神道研究の現状はほとんど幻滅するような様相を呈しています。1980年代から90年代にかけて神道関係の出版物は増大しているのですが、日本研究の一般的発展と比較すると、研究対象としての「神道」の意義が高まっているとは言えません。むしろ、第二次世界大戦後からこのテーマはずっと片隅に追いやられていると言わなければならないでしょう。

こうした実態とその原因については、おそらくドイツ語圏以外の西洋の日本学でも似たようなものでしょう。第一に、このテーマの周縁化は、日本学の一般的対象としての「日本文化」という概念に関わる根本的なパラダイム転換と関係しているように思われます。その場合、このパラダイム転換は「文化」一般とか、特別な意味での「日本文化」の本質を一義的に定義しようとするものではありません。そのような定義は創立者世代の日本学でも現代の日本学でも持ち合わせておりません。むしろ、この転換は別の「主導的学問」と呼べるような専門分野への志向性を基盤にして起きています。つまり、戦前の日本学は異文化の取り扱いに際し、とくに哲学と神学、または文献学によって主導されていたとすれば、今日では社会学と社会人類学が指導的役割を担っています。言語学や文学などの学問は当時でも現在でも重要な位置を占めているわけですが、そうした言語学または文学史的な志向性を持つ学者も歴史的テーマから現代社会に関わるテーマへと重点が移行しているのです。

そこで全体として、日本学の古い様式にとってはそれぞれの研究対象の根源とか由来とか成立などの問題が決定的な意味を持っていたのですが、現在では現状の記述と分析に重点が置かれていると言えるでしょう。ここでこのようなパラダイム転換の理由を詳しく述べることは紙面の都合でできませんが、ただ、神道というテーマだけでなく、宗教全般や歴史、古典文学にも影響していることは確かです。

さらにまた、このようなドイツ語圏の神道研究に対する特別な理由もあり、第二次世界大戦前後の日本学自体の歴史と密接に関わっています。同盟国としての日本を扱うことはナチ政権下においては特別に振興されたわけですが、同時に、他の専門分野と比較して日本学者の中でもナチの活動家の割合が多かったという事情もあります (Worm 1994)。戦後

になっても専門家の構成に変化がなかったために、彼ら教授たちの過去のナチ党員活動については慎重に回避されたのです。ただし、先に触れたように、神道を扱うこと自体がナチのシンパではないかという嫌疑をかけられたわけです。その帰結として、戦前では神道研究の分野で増大していた業績が、戦後には持続的な減少傾向を示すようになりました。神道自体が「穢れた対象」となり、神道と接触する人は誰もが穢れてしまうかのような感があったのです。戦前の日本学の成果には手をつけず、批判的な対決には至りませんでした。ネリー・ナウマンを除くと、ドイツ語圏における神道研究は少なくとも一世代の間、凍結されていました。1980年代になって国家神道ならびに自分たち独自の研究史が批判的に処理されるようになり、徐々に心理的硬直状態を脱したアプローチが再び可能になったのです。ただし、当然かもしれませんが、神道研究がドイツ語圏日本学の中で連続的な研究テーマとして新たに定着したとは言えません。

質疑応答

【司会】

どうもありがとうございました。個人的にバラバラに知っている名前が、文脈の中に非常によく整理されて紹介されまして、ドイツ語圏における神道の研究の流れを、大変短い時間の中で非常にスッキリと整理していただきました。個人的にも大変ありがたい発表をいただきました。

非常に面白い発題ですので、とくに、こういうところの流れに関してもう少し突っ込んで聞きたいというようなこともあるかと思います。20分ほど質疑応答の時間を設けたいと思いますので、どなたからでも結構ですので、ご質問ください。

【田島忠篤】

天使大学の田島と申します。南西諸島の研究をしておりますと、どうしても触れなければならないのが、ドイツのスラヴィック教授とヨーゼフ・クライナー教授だと思うのです。そういったウィーン学派の民俗学的な研究が、途中から継続されていけなかったという、その流れにつきまして、どうしてそのようになったのかを知りたいのです。

というのは、先生の今の発言の中では、いわゆる始原的な研究から、だんだんと現実在即した社会学、社会人類学研究にパラダイムがシフトしたときに、1つの大きな、両方を



跨ぐ学派ではないかと思うのですが、その点について質問したいと思います。

【シャイド】

まず、スラヴィック先生のような研究がなぜ中断したのかという質問について説明したいと思いますが、それは恐らく、ウィーン学派という研究の歴史との関係もあります。つまり、ウィーン学派は少し古い組織で、戦後の人類学というようなところで批判されていました。だから、ウィーン学派の代表者自身も、そういうアプローチが続けることができないというような態度もありました。ですから、ウィーン学派から影響を受けた日本学も、だんだん続けることができなくなりました。

もう少しパラダイム転換について述べるなら、もちろん、ウィーン学派に対する批判はパラダイム転換の1つのステップみたいな発展だと思います。

【田島】

私の解釈が正しいかどうか……。ウィーン学派はどうしても、現地調査をしても、例えば、沖縄の調査をした場合に、日本文化のルーツがそこにあるというような解釈を、「無理に」と言うとおかしいのですが、持っていこうとしたような気がして、どうも現実の調査をしても、それを何か始原的なパラダイムに転換していこうとしたのが問題だったのかなというように、いまの先生のお話を聴いて思いました。

【シャイド】

ある意味で、ネリー・ナウマンはそういう研究を続けました。だから、問題設定そのものはおかしくないでしょう。問題の背景には、できるだけ特別な原始社会をつくろうという意図もありましたから、ウィーン学派はその点で批判されています。

【司会】

田島さん、よろしいでしょうか？ありがとうございます。では、別の方の質問にいきます。森さん、どうぞ。

【森瑞枝】

国際宗教研究所の森と申します。やはりネリー・ナウマンさんの研究についてですが、ナウマンさんが神道というカテゴリーを避けておられたという点についてです。これは1つには、黒田俊雄さんと同じように、研究結果として、そういうカテゴリーは成り立たないというふうな立場もあったと思いますが、そのほかに、やはり戦前、あるいは戦中の研究での「神道」という概念の扱いに対する反省、あるいは反発というものも、その背景として彼女には働いていたのでしょうか。

【シャイド】

そういう点について、具体的には答えられませんけれども、そういう背景もあったという可能性はあると思います。

【司会】

後ろの方で手を挙げておられる方、磯前さん、どうぞ。

【磯前順一】

日本女子大学の磯前と申します。お話しされたことと重なるかもしれませんが、国家神

道、あるいは神道と国家主義の関係について伺いたいと思います。1 つは、どのような点を巡って議論がなされているのでしょうか。議論の焦点、つまりドイツ語圏では、国家神道をどのような形で議論しようとされているのでしょうか。議論の軸をおうかがいしたいと思います。

もう1つは、そのような研究がどのような視点から出てきたのか。どのような流れの中で出てきたのか。もう既に触れられた点もあると思いますが、多少細かく教えていただければと思います。

【シャイド】

国家神道と言えば、ドイツ語圏では恐らく、クラウス・アントニとエルンスト・ロコヴァントが一番代表的な学者でしょう。もちろん、それぞれの視点はだいぶ違います。ロコヴァント先生はだいたい法制から、つまり、彼はもともと法律を研究した人ですから、だいたいその点、つまり、法律制度から神道のイデオロギーがどのように生じえたのかという問題について研究されたそうです。アントニ先生は、イデオロギーそのものを対象にして、例えば、「神道は無宗教」というような概念についても発表しました。

【磯前】

そういう研究が、例えばアントニさんだったら、ネリー・ナウマンの神話研究から続いていたということですが、そのような国家神道に対する研究が、なぜ新しく出てきたのかという原因を、お考えのところを聞かせていただければと思います。

【シャイド】

実は、もっと早くそういうテーマを扱う必要があったと思いますが、本人がまだ生きていましたので、ちょっと回避したそうです。ですから、個人的には言うかもしれませんね。自分の先生を批判することは、あまりできなかったようです。

例えば、ホルスト・ハミッチュは戦後はわりと偉い学者になりましたから、誰も批判できないような状態でした。でも、アントニ先生の世代は、直接ホルスト・ハミッチュとの関係はあまりなかったもので、だんだん批判も出てきたのだと思います。

【磯前】

そうしますと、やはりドイツ語圏では国家神道のイデオロギー批判のような研究が中心になると理解してよろしいのでしょうか。

【シャイド】

全体的に言えば、もちろん、ある程度重要なテーマになりましたが、一番重要なテーマではないと思います。

【司会】

他にご質問のある方おねがいします。平野さん、どうぞ。

【平野孝國】

新潟大学名誉教授の平野と申します。私は、いまお話に出てまいりましたホルスト・ハミッチュの弟子です。ハミッチュ先生の研究というのは、『倭姫命世記』の研究です。それから、講義でもってやっていたのは、『続日本紀』の独訳です。どうということがハミッ

チュ先生の学問だったかということを考えると、やはり伝統的な、非常に文献学的に正確に、これをドイツ語に翻訳するというのが 1 つの中心的な課題であって、その中に、例えば『倭姫命世紀』、倭姫命というものがどのような意味を持ったかというようなところには行ってらっしゃらないと思うのです。

それで、戦争が終わったという時点において、転換というのではないけれども、神道の思想的な中心を俳諧の世界—『禅茶録』を一緒に読んだのですが—、そういう方向に行ったのではないか。先生の晩年には、俳句をたくさん翻訳してらっしゃいましたが、そういうところに日本精神を見つけようとしていらしたのではないかというふうに考えます。

【シャイド】

実は、私が示した研究傾向の中で、いろいろ個人的な指向もあったと思いますが、全般的に見ても、例えば、ホルスト・ハミツチュだけではなく、グンデルトも戦後になって、神道について全然研究しなかったし、彼も禅宗について勉強したそうですが、いろいろな例もありますから、全体的にそういう傾向があるのではないかと思います。

もちろん、個人的に見れば、いろいろと個人的な理由もあるはずでしょう。デュモリンの場合もそうでしょう。

【司会】

どうもありがとうございました。あとお 1 人ぐらい質問を受ける時間がありそうですね、どなたか……。どうぞ。

【森】

たびたびすみませんが、もう 1 点お願いします。今日ご紹介いただいたイデオロギー批判は、主に近代の国家神道に関するものでありますが、このところアメリカなどでは、民俗学や近世の思想史、国学のイデオロギー批判がたいへんさかんであるように見うけます。その場合、ドイツ語圏では、こういう方向性というのは現在あるのか、あるいは、そういう民俗学や近世国学などのイデオロギー批判をしたい人はアメリカに行ってしまうのか。どういう状況なのでしょう。

【シャイド】

その点で、やはりアメリカの研究はもっと進んでいると思います。しかし一般的には、ヨーロッパとアメリカの日本学を比べますと、やはりアメリカのほうがたくさん活動があって、いろいろな研究もありますので、残念ながらあまり比較できないような状態です。

【司会】

私のほうから 1 つだけお聞きしたいのですが、最後のほうの新宗教研究というものが、そのまへの展開とちょっと異質なような気もするので、どういうことがきっかけになってそういう研究が出てきたのか。それはドイツ語文化圏の問題なのか、あるいは、その当時の世界的な研究の流れの影響なのか、もしご存じでしたらお聞かせ願えますか。

【シャイド】

実は、僕自身はその研究はそんなに詳しくないのですが、恐らく、ある程度国家神道とのつながりもあるのではないかと思います。つまり、戦後になって、神道というものはど

ういうふうに発展したのかというような視点から研究したこともあると思います。

【司会】

そろそろ時間がまいりましたので、これでシャイドさんのご発表及び質疑応答は、これで終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。（拍手）

参考文献

Klaus Antoni

- 1982 *Der Weiße Hase von Inaba. Vom Mythos zum Märchen* [因幡の白兔—神話から昔話へ]. München: Steiner Verlag.
- 1988 *Miwa, der Heilige Trank in der japanischen Überlieferung* [美和、日本伝承における聖なる飲物]. Stuttgart: Steiner Verlag.
- 1991 *Der Himmlische Herrscher und sein Staat. Essays zur Stellung des Tennō im modernen Japan* [天の支配者とその国家—近代日本における天皇の位置についての論考]. München: Iudicium.
- 1998 *Shintō und die Konzeption des japanischen Nationalwesens (kokutai)* [神道と日本国体の構想]. Leiden: Brill.

Heinrich Dumoulin

- 1940 (石橋智信共著) „Yuiitsu-Shintō Myōbō-yōshū: Lehrabriß des Yuiitsu-Shintō [唯一神道名法要集: 唯一神道の教理概要].“ *Monumenta Nipponica* 3: 182-239.
- 1943 *Kamo Mabuchi, (1697-1769). Ein Beitrag zur japanischen Religions- und Geistesgeschichte* [賀茂真淵(1697-1769): 日本宗教・思想史への貢献]. Tokyo: Sophia University.
- 1959 *Zen - Geschichte und Gestalt* [禅—歴史と形態]. Bern: Francke Verlag.
- 1985 *Geschichte des Zen-Buddhismus* [禅仏教の歴史]. *Band 1: Indien und China* [第一巻: 印度と中国]; *Band 2: Japan* [第二巻: 日本]. Bern: Francke Verlag.

Peter Fischer

- 1979 *Buddhismus und Nationalismus im modernen Japan* [近代日本における仏教と国家主義]. Bochum: Brockmeyer.
- 2001 „Zu einigen Problemen der ‚Shintō‘-Wörterbücher in westlichen Sprachen im Kontext der ‚Shintō‘-Forschung allgemein [西洋語圏における「神道」辞典に関する若干問題: 一般「神道」研究のコンテクストに].“ *Nachrichten der Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens* (NOAG) 167-170 (2000-2001): 347-381.

Karl Florenz

- 1892 *Nihongi oder Japanische Annalen. Geschichte Japans im 7. Jahrhundert, Buch 22-30* [日本紀: 七世紀の日本歴史、巻第二十二～三十]. Tokyo: Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens.
- 1901 *Japanische Mythologie. Nihongi „Zeitalter der Götter“, nebst Ergänzungen aus anderen alten Quellenwerken.* [日本神話学: 日本紀の神代巻並びに他の原典付録]. Tokyo: Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens.
- 1919 *Die historischen Quellen der Shinto-Religion* [神道宗教の歴史的原典]. Göttingen, Leipzig: Vandenhoeck&Ruprecht.

Susanne Formanek

- 2000 “Shaji sankei mandara. Pilger-Bilder zwischen Heilsobjekt und religiösem Werbeplakat und ihre Beziehungen zum Edo-zeitlichen Pilgerwesen [崇拝対象と宗教宣伝の間にしての社寺参詣曼荼羅並びにその巡礼システムとの関係].” Shiro Kohsaka, Johannes Laube (編) *Informationssystem und kulturelles Leben in den Städten der Edo-Zeit*. Wiesbaden: Harrassowitz, 97-119.

布施 昌一

1988 『シーボルトの日本史』。東京：木耳社。

Wilhelm Gundert

1925 *Der Schintoismus im japanischen Nô-Drama* [能楽における神道]. Hamburg.

1935 *Japanische Religionsgeschichte* [日本宗教史]. Stuttgart.

Horst Hammitzsch

1936 *Hirata Atsutane - ein geistiger Kämpfer Japans* [平田篤胤—日本の精神的闘士]. Tokyo: OAG.

1937 *Yamato-hime no Mikoto Seiki. Bericht über den Erdenwandel Ihrer Hochheit der Prinzessin Yamato. Eine Quelle zur Frühgeschichte der Shintō-Religion* [倭姫命世記：神道宗教初期の原典として]. Universität Leipzig.

1939 *Die Mito-Schule und ihre programmatischen Schriften bairi sensei hiin, kōdōkanki, kōdōkangakusoku, seki no uta in Übersetzung: Ein Beitrag zur Geistesgeschichte der Tokugawa-Zeit* [水戸学派とその基調演説：「梅里先生碑陰」「弘道館記」「弘道館学則」「夕の歌」の翻訳。徳川時代思想史への貢献]. Tokyo: OAG.

1981 *Japan-Handbuch* [日本ハンドブック]. Wiesbaden: Harrassowitz.

James W. Heisig

1985 "Editor's introduction [序文]." *Japanese Journal of Religious Studies* 12/2-3 (A Tribute to Heinrich Dumoulin, Guest Editor: James W. Heisig): 109-117.

Engelbert Kaempfer (edited, translated, and annotated by Beatrice M. Bodart-Bailey)

1999 *Kaempfer's Japan: Tokugawa Culture Observed* [ケンペルの日本：徳川文化の観察]. Honolulu: University of Hawai'i Press.

Klaus Kracht

1985 *Studien zur Geschichte des Denkens im Japan des 17. bis 19. Jahrhunderts. Chu-Hsi-konfuzianische Geist-Diskurse* [近世日本の思想史研究：朱子学の「神」に関する論考]. Wiesbaden: Harrassowitz.

Josef Kreiner

1969 *Die Kultorganisation des japanischen Dorfes* [日本の村の祭祀集団]. Wien: Braumüller Verlag.

1979 「岡先生とヴィーシー学説の裏づけ」岡正雄『異人その他：日本民族・文化の源流と日本国家の形成』言叢社、453-480頁。

1996 「序文」ヨーゼフ・クライナー編『日本民族学の現状』新曜社、i-vii頁。

Kuroda Toshio

1981 „Shinto in the History of Japanese Religion [日本宗教史における神道]." *Journal of Japanese Studies* 7/1 (1981): 1-22.

Johannes Laube

1978 *Oyagami. Die heutige Gottesvorstellung der Tenrikyō* [オヤガミ—天理教における現在の神概念]. Wiesbaden: Harrassowitz.

Ernst Lokowandt

- 1976 *Die rechtliche Entwicklung des Staats-Shinto in der ersten Hälfte der Meiji-Zeit (1868-1890)* [明治時代前半における国家神道の法的発展]. Wiesbaden: Harrassowitz.
- 2001 *Shinto: eine Einführung* [神道入門]. München: Iudicium.

Oka Masao

- 1933 *Kulturschichten in Alt-Japan* [古日本の文化層]. ウィーン大学博士論文.

Nelly Naumann

- 1959 „Das Pferd in Brauchtum und Sage Japans [日本の風俗と伝説における馬].“ *Folklore Studies* 18, 145-287.
- 1970 „Einige Bemerkungen zum sogenannten Ur-Shintō [いわゆる原始神道への若干の注釈].“ *Nachrichten der Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens* (NOAG) 107/108 (1970), 5-13.
- 1988 *Die einheimische Religion Japans* [日本の土着宗教]. *Teil 1: Bis zum Ende der Heian-Zeit* [第一巻: 平安時代の終わりまで]. Leiden: Brill.
- 1994 *Die einheimische Religion Japans* [日本の土着宗教]. *Teil 2: Synkretistische Lehren und religiöse Entwicklungen von der Kamakura- bis zum Beginn der Edo-Zeit* [第二巻: 鎌倉時代から江戸時代初期までの結合的教理と宗教的展開]. Leiden: Brill.

Bernhard Scheid

- 2001 *Der Eine und Einzige Weg der Götter. Yoshida Kanetomo und die Erfindung des Shinto* [唯一つの神の道: 吉田兼俱と神道の発明]. Wien: Verlag der Akademie der Wissenschaften.

Alexander Slawik

- 1936 *Kulturschichten in Alt-Korea* [古朝鮮の文化層]. ウィーン大学博士論文.
- 1953 *Zur Kulturgeschichte der Ainu* [アイヌ文化史について]. Universität Wien.
- 1959 „Zum Problem des ‚Sakralen Besuchers‘ in Japan [日本における「マレビト」の問題について].“ *Ostasiatische Studien* 48, 196-207.
- 1993 „Die Susanowos - Vielerlei Gestalten unter einem Namen, ihre Mythen, Sagen und die ältesten chinesischen Japanberichte [スサノオたち—その多様の形・神話・伝説、または中国の最旧日本記録], in: Klaus Antoni, Maria-Verena Blümmel (編), *Festgabe für Nelly Naumann*. Hamburg: MOAG 119, 341-351.

Klaus Vollmer

- 1995 *Professionen und ihre „Wege“ im mittelalterlichen Japan. Eine Einführung in ihre Sozialgeschichte und literarische Repräsentation am Beispiel des Tōhoku'in shokunin utaawase* [中世日本における職業とその「道」: 職業社会史と文化的表現の入門、東北院職人歌合を例にして]. Hamburg: OAG.

Herbert Worm

- 1994 „Japanologie im Nationalsozialismus: Ein Zwischenbericht [ナチス時代の日本学—中間報告].“ Gerhard Krebs, Bernd Martin (編), *Formierung und Fall der Achse Berlin-Tōkyō*. München: Iudicium Verlag. 153-186.